

FUNCTIONAL SENTENCE PERSPECTIVE (FSP)

の英語および日本語の記述への応用の試み

宮 井 捷 二

1

Functional Sentence Perspective (FSP) はチェコ語の Funkční perspektiva větná に相当する。周知のように、FSP はプラーク学派が開発し発展させたもので、それはまた、Actual Sentence Analysis とか Actual Sentence Division とか Contextual Organization of the Sentence とか呼ばれることもある。この接近法の基本的な態度は、文を形式的な面よりも、むしろ「機能的な」面から分析しようとするものである。すなわち、文の要素の配列を実際の場面（言語的および非言語的脈絡）と関連づけて考察しようとするものである。このような観点から見た場合、文は2つの基本的な部分から成る。1つは既知の情報 (known information)、または脈絡から知り得る情報、を含む部分であり、もう1つは新しい情報 (new information) を含む部分である (cf. Firbas 1959; Vachek 1966; Vachek 1970)。そして前者は文の基本 (basis)、主題 (theme) などと呼ばれ、後者はそれについて何かが述べられるものとして文の核、陳述 (rheme) などと呼ばれる (cf. Mathesius 1975: 81 and 185)。

このように文（当面は平叙文だけを考える）は2つの要素から成るという考え方、言わば文の二分法はずっと以前からすでにドイツの言語学者によって考察されていたことを指摘して、Vilém Mathesius (1882—1945) は次の研究をあげている (cf. Mathesius 1975)。すなわち、George von der Gabelentz. 1891. *Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*. Hermann Paul. 1920. *Prinzipien der Sprachgeschichte*. Ph. Wegener. 1885. *Untersuchungen über die Grundfragen des Sprachlebens*. である。これらのドイツの学者は大部分、文の2つの部分を表わす用語として、心理的主語⁽¹⁾および心理的述語を用いている。これらの用語は、それぞれだいたい主題と陳述に当るが、常に一致する訳ではない。FSP の真の開拓者は Henri Weil というフランスの古典学者で、その論文は *De l'ordre des mots dans les langues anciennes comparées aux langues modernes* で1844年に出版された (Firbas 1974: 11—2 and Mathesius 1975: 81)。しかし、FSP のように高度に発展した形ではなくても、FSP の基盤になっているのはヨーロッパの伝統的な考え方の中にあるものである。たとえば、さらにさかのぼって、James Harris (1751) は、定冠詞と不定冠詞の機能を説明するのに、‘Known, or unknown?’ の原理を持ち出して、不定冠詞 *a* は未知なものを示し、定冠詞 *the* は既知のものを示すとして論を進めている (*Ibid.*, Book II, Chapter I 参照) が、Harris は結局 FSP を基本的に指摘していると言える (cf. Grieve 1973)。さらに、ギリシャ時代までさかのぼって、プラ

トンは文 (lógos) の2つの主な構成素として *ónoma* と *rhêma* を認めていたと言える (cf. Robins 1966; Lyons 1969: 334—7 and 10—2)。

問題は、FSP の理論の枠内で (すなわち、文法的基準ではなく FSP の基準で分析する場合)、一般的に文をいくつかの部分に分けるかである。二分法か三分法か、あるいはそれ以上に分けるか。このことは人間の思考形式にかかわる重大な問題である。

2

本論文の主な目的は FSP を正しく評価し、その理論を英語や日本語などの自然言語の記述に応用すれば、他の理論では得られない成果が得られるということを示そうとするものである。

FSP を記述言語学の理論として完成させたのは Mathesius であるが、その後チェコのいろいろな学者が FSP の発展に貢献した。なかでも、Jan Firbas の仕事がすぐれている。Mathesius も Firbas も対象言語はチェコ語、ドイツ語、英語、ロシア語などヨーロッパの言語が中心で、彼らの興味の中心は FSP と語順の関係である。ごく常識的に、話し手が聞き手にとって未知だと考えるものをいきなり提示し、それについて既知の情報を与えるのは不自然で、その逆の順序すなわち、既知+未知、が自然である。これを文の要素の配列にあてはめて、文の要素は既知から未知へ (‘from the known to the unknown’) の順にならべられるというのが FSP の原理である。この原理は、各言語の間に差異はあるがヨーロッパの言語において、一般的にと言える程度に認められる。

Mathesius によれば、FSP の語順におよぼす影響は英語におけるよりもチェコ語においての方が大きい。チェコ語については、FSP が主に語順を支配し、文法上の原則やリズム上の原則は二次的なものである。これに対して、英語においては、文法上の原則が語順を大きく左右し、FSP やリズムなどはそれほど語順に影響を与えない (cf. Firbas 1956: 39—40)。したがって、FSP はチェコ語には良くあてはまるが、英語にはうまく適用できないという主旨のことを Mathesius は言っている (cf. Firbas 1959: 40 and Mathesius 1975: 85)。なるほど、英語は語形変化の複雑なチェコ語などと比較すれば語順は厳しく、たとえば動詞が文のどの位置にも自由に動くことができるという訳にはいかないが、FSP について上のような一般化が成り立つとは言えない。英語の場合でも、具体例にあたって詳細に検討してみると FSP への適用性が相当高いことが分る (この論文の後半参照)。

さて、Firbas は文の各要素が「伝達を前に押し進める」(‘push the communication forward’) のに貢献する度合を考える。すなわち彼の言う Communicative Dynamism (CD) の度合である。たとえば、

(1) He was cross. (Firbas 1972: 78)

(1)では、普通の (non-marked) 場合、*He* の CD の度合がもっとも低く、*cross* の CD の度合がもっとも高く、*was* の CD の度合はそれらの中間である。Firbas の考えでは、文の全ての言語的要素は何らかの意味をもつ限り CD をもち得ることになる。事実、Firbas (1959) では、英語、チェコ語、ドイツ語からの具体例について細かく数字で各文の要素の CD の度合を示したが、その後の論文では数字で CD を示すことはだんだんなくなってきた。いずれにしても、Firbas は CD を基準にして文を3つの部分に分ける (つまり3分

法)。すなわち、文または節の中でもっとも低い CD をもつものは *theme*、もっとも高い CD をもつものは *rheme*。そしてこれら 2 つの中間的な橋渡しの部分は *transition* である⁽²⁾。(1)では、*He* が *theme*、*was* が *transition*、そして *cross* が *rheme* である。Firbas は FSP を定義して、文の内部の要素への CD の種々な度合の分布としている⁽³⁾。そして、この分布は文の意味および文法構造の相互作用に影響されるが、基本的な分布は、これまで述べてきたことから分るように、文のはじめに CD の低い要素がきて文の終りに近づくにつれて CD の高い要素がくるといふものである。つまり、伝達という面から考えて、重要なものほど後にくる〔言う〕ことになる。

(2) He made me ANGRY.

(2)においては、ANGRY がもっとも情報量が大きく、そこに音声上の顕著さ (*prominence*) が与えられる。すなわち、この語がもっとも強く高く発音され、音調の核をなす。(今後、英語の例において音調の核をなす語は大文字で表わすことにする)。FSP の理論は、情報の伝達を常に音声面と結びつけて考察し、FSP と音声上の特徴の間には相関関係があることを指摘している点は注目に値する。なお、FSP と *intonation* との関係について先駆者的な研究をしたのは Schubiger (1935 and 1958) である⁽⁴⁾。

語順と意味とさらに音声との関係について、FSP の理論と基本的に共通するところがあるが独創的な理論を発表したのは D. L. Bolinger で、特に彼の *Linear Modification*(1952) においてである。Bolinger (1952: 1125—6) は一般に文の要素の文中における位置が、後になればなるほど意味が進展する〔または意味範囲がせばまる〕ことを示すために次のような例をあげている (*cf.* 佐々木 1966: 82—101)。

(3) *Slowly* he backed away.

(4) He *slowly* backed away.

(5) He backed *slowly* away.

(6) He backed away *slowly*.

これらの中で(6)の *slowly* の CD の度合〔伝達の前進に貢献する度合〕が一番高いことは一般的に認められている。しかし、(3)、(4)、(5)のそれぞれの *slowly* についてはどうであろうか。果して、この順に意味が進展すると言えるかどうかはかなり複雑な問題である。その 1 つの理由は、(6)の *slowly* のような文副詞は特別な場合 (*marked*) と考えられるということである。英語の構造上、(3)の *slowly* は特別な位置、すなわち文頭にあるという事実だけでその情報量は大きいと考えられる (これらの点については後で述べる)。このように、CD の問題に関しては語順が重要であるが、語順だけでは処理できるものではなく、語順も含めていろいろな要因を考慮する必要がある。いずれにしても、Bolinger は言語の線条性 (*linearity*) と情報伝達の関係について実に明解な提案をした。そして、意図したことではなかったかもしれないが、Bolinger が FSP の理論の発展に大きく貢献したことは否定できない (*cf.* Firbas 1972: 78)。

Firbas の理論の基本である CD については批判もある。その 1 つは、結局 CD を決定することは困難なのではないかというものである。これは CD を決定する基準は何かという問題に至る。その答はおそらく、CD は究極的には *context* (脈絡) によって決められるということになる。ある種の *discourse analysis* (談話分析) を行うことによって CD は明らかになる。Firbas も脈絡への依存性、独立性を考慮しており、FSP の理論は脈絡の問題と切り離しては成り立たない。

FSP に基づけば文は theme-rheme, すなわち主題+陳述という構造をもつことになる(但し, Firbas は theme-transition-rheme の構造に固執する)。このような文の構造は世界中のかなり多くの言語に存在することがすでに知られており, さらにすすんで, FSP は全ての言語に共通のもの (linguistic universality) だと考えることができる (cf. Halliday 1974: 44)。つまり, 「～については, ～である」というタイプが情報を伝えるためのもっとも基本的な型である。

日本語も FSP がよく適用できる言語であることはすでに指摘されている (cf. 三上 1963 and 1972; Kuno 1972)

(7) あの人は英語の先生です。

(8) 今夜は晴れでしょう。

これらは日本語の典型的な theme-rheme 構造をもった文の例である。さらに, 助詞が新情報を導入するのに対し, 助詞は旧情報すなわち主題を導入する機能をもつことが今ではおそらく世界の多くの言語学者に知られている。

(9) 私はアイスクリームが好きです。

(10) 私はアイスクリーム。(喫茶店などで注文するとき)

(11) 彼はお父さんが学者です。

などの文も theme-rheme 構造であると考えられる。そして, これらにおいても, rheme の部分に音声上の prominence が与えられる。日本語は theme-rheme の構造になる傾向が非常に強い, 言いかえれば, FSP への適用性 (susceptibility) が非常に高い言語であるとされる。このことを確かめるためには, もっと調査を行う必要があるが, 新聞の記事などの書き出しは, 「政府は……」, 「五十日間の会期が決まった臨時国会は……」のように, 「～は～である」の型が非常に多いことは注目に値する。

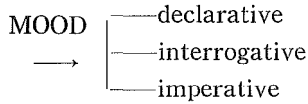
FSP は M. A. K. Halliday を中心とするいわゆる Systemic Linguistics にも大いに取り入れられた。Halliday (1967 et al.) は FSP を英語の記述に応用して精密な分析を行った。それによって, FSP は多くの言語学者の注目を浴びるようになった。少なくとも日本ではそれ以前には FSP はあまり知られていなかった。ここで Halliday の理論を思い出してみると, 彼は Bühler (1934) の Darstellung, Ausdruck および Appell の 3つの言語機能を参考にして, 英語の節は他動性 (transitivity), 叙法 (mood) および主題 (theme) の 3つの主な構文上の選択領域から成り立っているとす。他動性は認識内容に関する選択の束, すなわち言語外経験の言語的表現である。これを Halliday は言語の experiential (or ideational) function と呼ぶ (cf. Halliday 1970)。このような機能によって, 言語は経験に構造を与える。(これは後述のことからも分る様に, Fillmore (1968) の case relations と密接な関係をもつ)。他動性において主たる役割を果たすのは process, participant および circumstance で, これらは従来の動詞, 名詞および副詞に相当する。Berry (1975: 149) からの例をあげて説明すると。

(12) John kicked the ball by accident.

(12)においては, John と the ball という participants が the process of 'kicking' に

関与している。process には circumstance が伴い、たとえば時や場所や理由の circumstance があり、by accident は理由をあらわす。

次に、叙法は言語活動参加者の場面への関与のし方を表わし、話し手に伝達、質問あるいは命令などの話法形式の選択の束を与える。すなわち次のようになる (Berry 1975 : 143)。



このような言語の働きを Halliday は inter-personal function と呼ぶ。

さらに、主題は節の情報構造 (information structure) に関係する。この言語の働きを Halliday は textual function と呼ぶ。そして FSP はこの三番目の言語機能と非常に密接に結びついたものである⁽⁵⁾。プラグ学派の人々も言語を3つのレベルに分けて考えている。たとえば、Firbas は意味的、文法的小および FSP の3つのレベルを区別している (Firbas 1972 : 81 and Firbas 1974 : 35)。

大事なことは、言語現象にはこれら3つの機能のどれか1つだけが作用するというのではなく、3つがいろいろな程度に相互に作用する。したがって、どの文も次に示すように3つのレベルから分析することができる。Halliday (1974 : 49) は言語のこれらの機能は次の表に示されたように表われるとしている。

	<i>the sun</i>	<i>was</i>	<i>shining</i>	<i>on the sea</i>
experiential :	Actor	Process		Locative
interpersonal :	Modal		Propositional	
textual :	Theme	Rheme		

この表のような分析が最終的だという意味ではなく、今後の検討の資料としてそのまま引用してみた。なお、Halliday の主題 (theme) という用語は言語機能を意味する一般的な名称として、すなわち theme system の意味として使われる場合と、文の要素の役割を示す場合とがある。後者は、Firbas などと同様な意味で使用している。

これまで述べてきたことから分るように、theme-rheme は文の text (つまりただ、でたらめに語をならべたのではなくあるまとまった語群) としての働きと密接に結びつくものである。話し手も聞き手も text と non-text の区別を知っていて、その場面に合った text をつくるからこそ伝達が行われるのである。すなわち、theme-rheme は文を情報の伝達の面からみた構造である。

たとえば、英語におけるいかなる text も情報単位 (information unit) から成り立っていると考えることができる。1つの情報単位には1つの情報焦点 (information focus) が含まれ、音声上では1つの音調の核が含まれる。さて話し手は文を発話する場合 marked か unmarked (一応 marked を unusual, unmarked を usual と考えてさしつかえない) かの選択をする。

unmarked な場合、1つの節は1つの情報単位である。1つの節が2つ以上の情報単位から成るときもちろんあるが、それらは marked な場合と考えることができる。たとえば、
 (13) //Gordon made me ANGRY// (//は情報単位の境界をあらわす)。

(13)のような文は英語のもっとも「普通の」文で、*Gordon* は動作主 (actor or agent) であり、主語であり、given であり、主題である。話し手が一番伝えたいことは、(made me) ANGRY という内容である。そして、音調の核は ANGRY にあり、これは、英語のイントネーション・パターンでは文強勢は文の最後の強勢のある音節におかれると従来から言われてきたことと一致する。また(15)や(16)のように言うこともできる。

(15) //GORDON//made me ANGRY//

(16) //GORDON made me angry//

(15)は焦点を2つもつ。(16)は‘Who made you angry?’に対する答であると考えることができる。または、両方とも「他の人ではなく *Gordon* が……」という意味、すなわち対照 (contrast) の場合であるとみなすこともできる (この論文の後半参照)。理論的には、文中のほとんどの要素も他の何ものかと対照、対比され、prominence が与えられ得る。ところで、(16)の場合と違って、(14)に対する必然的な疑問文は考えられない。たとえば、それは必ずしも‘What did *Gordon* do?’ではない。それはむしろ‘What happened?’のような極めて一般的な質問であると言える。すなわち、(14)は unmarked である。(16)は別の、構造上の手段を用いて、(17)のように、ほぼ同じ意味を伝えることができる。

(17) //It is GORDON who made me angry//

これまで述べてきたことから分るように、話し手は情報構造をどのようにするかについて、上記以外にもいろいろな選択が与えられている。まず、情報単位をいくつにするかについては、理論的には1つの文に含まれている辞書項目の数だけ設けることができる。しかしそれほど多くの情報を1つの文で伝えることはまずない。それは実際には、生理的、心理的に無理である。やはり聞き手 (または読者) が知っていることと知らないことを適当に織りまぜて (cf. texture: 織り, See Halliday and Hasan 1976 : 325), 適当な意味を伝えることができるものである。たとえば、

(18) This is my WIFE. (人に紹介する場合)

(18)においては、*this* は聞き手には明白な既知の情報であり、*my wife* は新しい情報である。このように、既知+未知が自然の組み合わせであって、既知+既知はおかしい。たとえば、

(19) This is your WIFE.

(19)は非常に特別な場面以外では unacceptable である。

このように、*this* とか *that* などの demonstrative や人称代名詞は当然既知の場合が多く、それが新しい情報を荷なって情報焦点とはなりにくい (なおこの論文の後半参照)。

なお、Halliday は known-unknown という用語には反対である。何故なら、必ずしも既知、未知ということがこの区別の基準でないからである。その代りに、given-new 構造を提案する。すなわち、given=what you were talking about (or what I was talking about before) そして theme=what I am talking about (or what I am talking about now) である。theme-rheme 構造と given-new 構造とが常に一致する訳ではなく、unmarked な場合に一致する。Halliday が主題とは何かを決める基準は語順であって、この点 Firbas が CD を基準にしたのとは大きな違いがある。CD の度合は前述のように「伝達を前に押し進める度合」であるから、この基準はあまり明瞭ではない。それに対して、語順は先にくるか後にくるかであって客観的に判定できる。

Halliday にとっては主題とは文の一番左端に位置する語または語群（接続詞などを除く）である。これは平叙文では非常に具合が良いが、疑問文の場合は事情が異なる。ところが、Halliday はどこまでも語順で押し通し、

(20) Who saw the PLAY?

(21) Did John see the PLAY?

(20), (21)においては、*Who*, *Did* がそれぞれ主題であると言う (Halliday 1967 : 212—3)。しかしこの考えはやや無理があるように思われる。

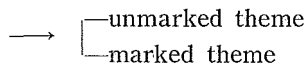
次に Halliday 独自の考えである *marked theme* について検討してみよう。

(22) //These HOUSES//my grandfather SOLD//

(23) //THAT//I don't KNOW//

(24) //TOMORROW//John's taking me to the THEATRE//

これらにおいては、*these houses*, *that* と *tomorrow* がそれぞれ *marked theme* である。話し手はこれらの要素を前面に出すことによって主題を重要視しているのである。そしてこれらは1つの情報単位をなすが、主題とみなされる。これらは強調 (*emphasis*) の1現象であるとして、強調したいものを前に置くと説明されることがある。しかし、普通でない構造がある項目を目立たせていると説明した方がよい。結局、主語が先頭に位置するのが普通であり、その本来主語の位置に副詞や目的語などがくるとその位置が文頭であるだけ一層目立つのである。少くとも英語を含めた多くの言語では、文頭と文尾が重要な位置であると言える。結論として、英語の平叙文においては、主語より先にくる辞書項目は *marked theme* である (cf. Huddleston 1971 : 315)。話し手の側としては、



のような選択をもつことになる。

前述のように、全ての *syntactic options* は他の *syntactic options* と同時に起るものであってどれか1つだけが起ることはない。しかしある1つの選択が他のものよりも非常に優勢に作用することはいくらかでもある。ところで英語に多くみられる受動態は動作主以外のものを主題にしようとするのが基盤になっているという主旨のことを *Mathesius* が以前に指摘している (cf. Halliday 1967 : 217)。さらに、科学論文などによくみられる受動態も、*theme-rheme* 構造に合わせようとする傾向からきていると説明できる (cf. Huddleston 1971)。受動態を用いるのは、第一には、(pre-passive の) 主語を修飾語 (*adjunct*) の位置に移し、それが *information focus* になるか全く省かれるかである。第二には、目的語を主語の位置に移し、*unmarked* の場合、それが主題となるものである。Huddleston の調査によると、科学論文では *by+Agent* すなわち上述の修飾語の位置に移されたものが省かれることが多い。それは動作主が文脈によって誰であるか判断できるからである。すなわち動作主はその論文の著者か実験者かの場合がほとんどである。

(25) There is an adequate supply of WATER.

(25)のような *there* ではじまる文も、*theme-rheme* 構造の観点からみると興味ある。これも基本的には、主語を動詞の後の位置に移し、それを音調の核を伴った情報の焦点にして、主語の位置に *dummy* の *there* を置くものである。

このように FSP を英語の記述にとり入れることは英国の言語学者の間ではかなり行われ

ていると言える。大学生用の文法書などにも *information focus* とか *given and new information* とか *theme* などが適当にとり入れられている (cf. Quirk and Greenbaum 1973) ことから判断すると、英国では FSP は Systemic Linguistics を通してある程度定着したと言える。

4

米国の言語学界では、FSP はあまり注目されていない。また、最近では英国の言語学界でも FSP は以前ほど論議されなくなってきた。

変形文法は従来から *topic-comment* (すなわち *theme-rheme*) の問題に関心をもっていた。最近、*focus* の問題が Chomsky などによって取り上げられた。しかしこれらの議論はいずれも変形文法の枠内でなされてきたもので (たとえば *topicalization* (話題化変形) のような形で)、FSP は全く無視されてきた。Chomsky (1970: 71) は *focus* は深層構造によって決定され、それは深層構造の *dominant proposition* の述語であり、また *focus* は表面構造では *intonation center* を含む句であると考えられるという主旨のことを言っている⁽⁶⁾。しかしそういうように複雑に考えないで、前述のように言語の分析のレベルに FSP を認め、*focus* は話し手が文の構成素の中で一番 CD の高いもの (または *rheme*) として選んだものであると考えた方が、言語現象をよりよく説明できる。なお、その後変形文法でも *focus* は表面構造の問題であると考えられるようになってきた。

米国の言語学者の中で FSP に関心をもつ人は少いが、Wallace L. Chafe や Susumu Kuno はそれぞれ立場は違いますが、FSP または同様な考え方に注目している。二人のうち、Chafe は Halliday にもしばしば言及し、評価もしているが、Kuno は FSP については Firbas 以外はあまり参照していないように思われる。

Chafe は心理学の立場から言語をみようとしており、*psychology* と *linguistics* の2つの学問分野が合体した学際的な、*psycholinguistics* の下位区分としての '*psychosemantics*' と呼ぶべき新しい分野を提案している (cf. Chafe 1973: 261)。さらに、*linguistics* と *psychology* と *anthropology* を合わせた '*combinational linguistics*' のような分野も考えている (1975年の東京における JACET Summer Seminar の講義による)。

さて、Chafe によると、*given information* とは話し手が話す時点において聞き手の意識の中にすでに存在すると考えるものである (cf. Chafe 1974)⁽⁷⁾。そして Chafe は Halliday と同様、全ての文は *given* と *new* の2つの部分からなると考えている (Chafe 1974: 112)。これは、彼の以前からの次のような仮説とも関連する。すなわち人間の概念の世界は大きく2つの領域に分けられる、1つは動詞の世界でそれは状態 (*states*) と事件 (*events*) を包含する、もう1つは名詞の世界でこれは物 (*things*) を包含する。そしてこれら2つのうち、動詞の方が中心である⁽⁸⁾。

Chafe は常に意識にあるものとして、代名詞とか定冠詞とか主題などをあげている (JACET Summer Seminar 1975)。英語においては、*given* は *low pitch*, *new* の方は *high pitch* を伴う。新情報をもつ動詞は新情報をもつ名詞を伴わない限り *high pitch* を伴う。

(6) It's RAINING.

②) He BROKE it.

これらの例においては名詞は代名詞化されていて新情報をもたず、特に②の *it* は全く情報をもっておらず、動詞が高いピッチを伴うことを妨げるものは何もない。

③) He broke the GLASS.

しかし③のような例では、名詞だけが低いピッチを伴う。従ってある程度の制限をつけて次のように言える。新情報の動詞が新情報の名詞に伴われるとき、名詞だけが低いピッチを伴う。ところが、これらは新情報の名詞が新情報の動詞の後にくる場合であるが、新情報の名詞が新情報の動詞の前にくる場合、(すなわち *marked* の場合) それらは両方とも低いピッチを伴う。

④) My SISTER is DYING.

⑤) The BUTTER MELTED.

新情報の名詞が新情報の動詞の低いピッチをおさえる (*suppress*) のはそのような名詞が後にくるときで、前にくるときは動詞のピッチをおさえることはない。以上のような Chafe の主張は FSP を扱う他の何人かの学者と基本的に共通するところがある。

さらに、Chafe は名詞が動詞に先行するにもかかわらず名詞だけが低いピッチを伴う例を検討する。

⑥) My SISTER died.

⑦) The BUTTER melted.

④, ⑤と⑥, ⑦の違いに最終的な説明を与えられないが、④および⑤における名詞と動詞の組み合わせ (*noun-verb combination*) は、⑥と⑦におけるような概念上のまとまり (*conceptual unity*) をあらわさないとと言える。たとえば、④では話し手の心の中で ‘*my sister*’ と ‘*death*’ の関係が *unit* をなしていないが、⑥ではそれが一体となってしまって *a single idea* になっている。Chafe はこの *conceptual unity* は言語学的説明に役立つと言う。たとえば、④と⑤には低いピッチが2つあるのに対し、⑥と⑦には低いピッチは1つしかない現象は、後者は文全体として1つのまとまった単位をなすと説明できる。このようにみると、*conceptual unit* というのは Halliday の情報単位に相当する。

Contrastiveness (対照) について、Chafe は *new information* と *contrastiveness* とがよく混同されると言う (*cf.* Chafe 1974 : 117—9 and Chafe 1976)。対照は特別な言及を要求する特別な現象の場合である。たとえば、話し手をあらわす ‘*I*’ は当然聞き手の意識に存在するもので、他の人称代名詞と同様普通低いピッチで発音されるが、⑧のように ‘*I*’ が低いピッチで発音されることもある。

⑧) *I* killed Cock Robin.

これは「あなたが考えている何人かの他の人ではなく、わたしだ」という意味をあらわす。日本語はこのような場合はガを使う。これは Kuno (1972) のいうガの *Exhaustive Listing* (総記) の機能で、「話題になっている人の中では私が私だけが」という意味である。これも *contrast* の一種だと Chafe は考えている (*cf.* ‘*exhaustive focus of contrast*’ Chafe 1976)。

⑨) 僕がコマドリを殺した。

*⑩) 僕がコマドリを殺さなかった。

⑪) 僕はコマドリを殺さなかった。

(37) 私はパーティに行った。

日本語では普通、対照をあらわすのはハで、(38)および(37)のハは対照をあらわしているとみることできる。もちろん単に主題をあらわしているともみることができ。その区別は話しことばではピッチによる。ところで(38)がどうして文法的でないのかは、なかなか説明し難い。しかし、最近の意味論の成果を参考にして、一応次のように考えられる。(38)の前提 (presupposition) は、「誰かがコマドリを殺した」であり、同時に当然コマドリを殺さないものは多い。したがって、自分だけをわざわざとりだしてコマドリを殺さない多勢の中に入れるのはおかしい。いずれにしても、こういう例にみられる日本語と英語の違いまたは類似は今後検討すべき問題である。

Chafe はごく最近の論文において、FSP を彼のいわゆる ‘packaging’ の1つとして説明している (cf. Chafe 1976)⁽⁹⁾。商品の包装が中味の質とある程度関係なしにその商品の売り上げに影響するのとちょうど同じように、言語における packaging も内容そのものよりもそれがどのように伝えられるか (‘how the message is sent’) に主に関係する。これは別の言い方をすれば言語のわく組み (framework) である。FSP はわく組であって、たとえば日本語のハは、「AハBである」のようなわく組みをつくるはたらきをする。Chafe (1976) の主張は、文中の名詞はある case status をもつ (すなわち格関係に関与している) と同時に、聞き手の知識に対する評価に基づいて選択するいろいろな ‘packaging’ status をもち得る。つまり、名詞は、(1)given または new, (2)対照の焦点, (3)定または不定, (4)文の主語, (5)文の主題, そして(6)話し手の観点 (point of view or empathy) (話し手が文中の誰の立場から発話しているか) をあらわす。

以上のような FSP に関するいろいろなアプローチをもっと豊富な言語データの説明に適用して検討する必要がある。事実、プラグ学派の言語学者は文学的テキストを分析するのに FSP を常に考慮している。また、最近の textlinguistics や textgrammar も theme-rheme 構造に注目している (たとえば Dressler 1973 参照)。

そこで、1つの試みとして、日本語のあるテキストとそれの英訳を theme-rheme 構造の観点から比較してみた。

A. 日本語のテキスト (1975年6月12日の朝日新聞, 天声人語から)

人間は神でもなければ、悪魔でもない。だから人間なのだろう。アメリカにも同じような言い方ができるかも知れぬ。自由で、民主的な国だ。と同時に、暴力的な風潮の根強い国だ。だからアメリカなのだろう。

テキストの構造

$$T_1+R_1[R'_1+R''_1] // (T_1)+R_2 // T_2+R_3 // (T_2)+R_4 // (T_2)+R_5 // (T_2)+R_6$$

T=theme, R=rheme, // は文の境界をあらわす, () は表面にあらわれないことをあらわす)

B. 英語のテキスト (上のAの英訳, *Asahi Evening News* から)

A human being is neither a GOD nor a DEVIL. That is probably why it is a human BEING. It may be possible to apply the same theory to the United STATES. It is a free and democratic NATION. At the same time, it is a nation in which the violence trend is very DEEPROOTED. That is probably why it is the United STATES.

テキストの構造

$$T_1 + R_1 [R'_1 + R''_1] // T_2 + R_2 // T_3 + R_3 // T_4 + R_4 // T_4 + R_5 // T_5 + R_6$$

これらを比較してみると、いろいろな構造上の違いに気がつく。まず、英語では代名詞であらわされる **theme** が、日本語では表面にあらわれないでその文は **rheme** だけから構成される。また、日本語では同じ **theme** がくりかえされるのに対し、英語では前の文またはその **rheme** が **theme** になる。すなわち、Bにおいては、 $T_1 + R_1 = T_2$, $T_3 + R_3 = T_4$, $R_5 = T_5$ という具合に構造上進展していく。

ただこれだけの調査だけでは一般化することは危険である。しかし、英語やその他のヨーロッパの言語は代名詞化が完べきであるのに対し、日本語では代名詞をあまり使わないことはたしかである。このことと密接な関係のあることであり、また上のテキスト分析でもみられたことでもあるが、日本語の日常会話は次のように **rheme** だけで行われることが多い。

(38) 疲れた。

(39) 大変ですね。

(40) ちょっと寄って行きますか。

つまり、日本語の話しことばでは、時には書きことばにおいても、話し手が聞き手が分っていると判断する主題（特に代名詞や場面そのものなど）は表面にあらわれないことが多い。この現象は従来は文法のレベルのみから考察され、主語の省略であると説明されてきた。もちろんこのような現象は英語や他の言語にもあり、アメリカの構造言語学者が **Fragmentary Sentence** と呼んだものの中で、“Great!” “Nothing.” などの **Adjectival** や **Nominal** だけから成るものなどは **rheme** だけで文を構成していると説明した方が都合がよい (cf. 宮井 1971)。

1976年 9月30日

註

- (1) “It is worth noticing that Trávniček agrees with Mathesius that the term ‘psychological subject’ (‘psychologický subjekt’) is less appropriate than the term ‘theme’ (‘východisko’)”. (Firbas 1964 : 274). なお、‘psychological predicate’ についても同様である。(cf. *Ibid.* p.279).
- (2) “In their non-marked use in FSP, they mediate between the thematic and non-thematic sections of a sentence or clause, i. e. between the section carrying the lowest and the section carrying the highest degrees of CD. They carry the lowest degree within the non-thematic section and constitute what may be called *transition proper* (in correspondence to *theme proper*, i. e. the element(s) carrying the very lowest, and *rheme proper*, i. e. the element(s) carrying the very highest degree of CD within a sentence or a clause). (Firbas 1972 : 81).
- (3) “I define FSP as the distribution of various degrees of CD over the elements within a sentence, the distribution being effected by an interplay (co-operation) of the semantic and grammatical structures of the sentence under conditions created by a certain kind of contextual dependence.” (Firbas 1972 : 82).
- (4) “It should be pointed out in this connexion that valuable contributions to the study of interrelations between grammatical structure and intonation have recently been offered, e. g. by M. A. K. Halliday, R. Quirk, H. Wode. Much useful pioneer research into the interrelations

between FSP and intonation has been done by M. Schubiger." (Firbas 1972 : 84).

- (5) "FSP can be defined, in this way, as the 'textual' component in the grammar of the sentence." (Halliday 1974 : 48).
- (6) "If so, then it would be natural to try to determine the focus and presupposition directly from the deep structure, in accordance with the standard theory, the focus being the predicate of the dominant proposition of the deep structure. Alternatively, one might propose that the focus is determined by the surface structure, namely, as the phrase containing the intonation center.

Consider next (42) :

- (42) (a) does John write poetry in his STUDY?
 (b) is it in his STUDY that John writes poetry?
 (c) John doesn't write poetry in his STUDY
 (d) it isn't in his STUDY that John writes poetry

Again, a natural response might be (43) :

(43) No, John writes poetry in the GARDEN

The sentences of (42) have as focus "study" (or "in his study") and express the presupposition that John writes poetry somewhere, a presupposition also expressed in the normal response (43)." (Chomsky 1970 : 71).

- (7) "Given information is suggested to be that which the speaker assumes to be already present in the addressee's consciousness at the time of an utterance." (Chafe 1974 : 111).
- (8) "My assumption will be that the total human conceptual universe is dichotomized initially into two major areas. One, the area of the verb, embraces states (conditions, qualities and events; the other, the area of the noun, embraces "things" (both physical objects and reified abstractions). Of these two, the verb will be assumed to be central and the noun peripheral." (Chafe 1970 : 96).
- (9) "Our starting point, then, is that the packaging phenomena relevant to nouns include the following: (1) the noun may be either *given* or *new*; (2) it may be a *focus of contrast*; (3) it may be *definite* or *indefinite*; (4) it may be the *subject* of its sentence; (5) it may be the *topic* of its sentence; and (6) it may represent the individual whose *point of view* the speaker is taking, or with whom the speaker empathizes." (Chafe 1976).

REFERENCES

- Berry, Margaret. 1975. An Introduction to Systemic Linguistics. Batsford.
- Bolinger, Dwight L. 1952. Linear modification. PMLA. 67. 1117—44.
- Chafe, Wallace L. 1973. Language and memory. Language. 49: 261—81.
- Chafe, Wallace L. 1973. Meaning and the Structure of Language. The University of Chicago Press.
- Chafe, Wallace L. 1974. Language and consciousness. Language. 50 : 111—33.
- Chafe, Wallace L. 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. To appear in Charles N. Li. (ed.). Subject and Topic. Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1970. Deep structure, surface structure, and semantic interpretation. in Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto (eds.). Studies in General and Oriental Linguistics. TEC

Company. 52—91.

Dressler, Wolfgang. 1973. Einführung in die Textlinguistik. Max Niemeyer Verlag.

Fillmore, Charles J. 1968. The case for case. in Emon Bach and R. T. Harms (eds.). Universals in Linguistic Theory. Holt, Rinehart and Winston.

Firbas, Jan. 1959. Thoughts on the communicative function of the verb in English, German and Czech. Brno Studies in English. 1 : 39—63.

Firbas, Jan. 1964. On defining the theme in functional sentence analysis. Travaux linguistiques de Prague. 1 : 267—80.

Firbas, Jan. 1972. On the interplay of prosodic and non-prosodic means of functional sentence perspective. in Vilém Fried. (ed.). The Prague School of Linguistics and Language Teaching. O. U. P. 77—94.

Firbas, Jan. 1974. Some aspects of the Czechoslovak approach to problems of functional sentence perspective. in František Daneš (ed.). Papers on Functional Sentence Perspective. Mouton.

Grieve, Robert. 1973. Definiteness in discourse. Language and Speech. 16 : 365—72.

Halliday, M. A. K. 1967. Notes on transitivity and theme in English. Part 2. Journal of Linguistics. 3 : 199—244.

Halliday, M. A. K. 1970. Language structure and language function. in John Lyons (ed.). New Horizons in Linguistics. Penguin. 140—65.

Halliday, M. A. K. 1974. The place of “functional sentence perspective” in the system of linguistic description. in Daneš (1974). 43—53.

Halliday, M. A. K. and Hasan, Ruqaiya. 1976. Cohesion in English. Longman.

Harris, James. 1751. Hermes: or, a Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammar. Reprinted by Nan-un-do.

Huddleston, Rodney D. 1971. The Sentence in Written English. Cambridge Studies in Linguistics. 3.

Kuno, Susumu. 1972. Functional sentence perspective. Linguistic Inquiry. 3 : 269—320.

Mathesius, Vilém. 1975. (edited by Josef Vachek). A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistics. Mouton.

三上章. 1963. 日本語の論理—ハとガー. くろしお出版.

三上章. 1972. 現代語法新説. くろしお出版.

宮井捷二. 1971. 英語のいわゆる Fragmentary Sentence について. 信州大学教養部紀要第5号.

Quirk, Randolph and Greenbaum, Sidney. 1973. A University Grammar of English. Longman.

Robins, R. H. 1966. The development of the word class system of the European grammatical tradition. Foundations of Language. 2 : 3—19. also in Robins. 1970. Diversions of Bloomsbury.

佐々木達. 1966. 言語の諸相. 三省堂.

Schubiger, Maria. 1935. The Role of Intonation in Spoken English. W. Heffer and Sons.

Schubiger, Maria. 1958. English Intonation, Its Form and Function. Niemeyer.

Vachek, Josef. 1966. The Linguistic School of Prague. Indiana U. P.

Vachek, Josef. 1970. Dictionnaire de linguistique de l'école de Prague. Éditions Spectrum.

Summary

Towards the Application of Functional Sentence Perspective (FSP) to the Description of English and Japanese

Shoji MIYAI

The main purpose of this paper is to review some of the notions of Functional Sentence Perspective (FSP) or related approaches that have been proposed by Vilém Mathesius, Jan Firbas, M. A. K. Halliday, Wallace L. Chafe and several other linguists, and to investigate the application of FSP to the description of English and Japanese.

The history of FSP and related notions is studied from within the European grammatical tradition.

Among linguists of the Prague School who have been concerned with FSP, Firbas regards FSP as the arrangement of sentence elements as it is viewed in the light of the context, both verbal and situational. Those sentence elements which convey something that is known, or may be inferred, from the context are regarded as the communicative basis, as the theme of the sentence. On the other hand, those sentence elements which convey new information are regarded as the communicative nucleus, as the rheme of the sentence. Basically, sentence elements are arranged according to the principle 'from the known to the unknown.' One of Firbas's basic concepts is that of communicative dynamism (CD) which is also discussed in this paper.

In the framework of systemic linguistics, the structure of the English clause is the outcome of the interplay of syntactic options in the three main areas of transitivity, mood and theme which are based upon three basic functions of language: experiential, interpersonal and textual functions. This distinction of levels of analysis should be adopted in the description of any other natural language. FSP or the theme-rheme structure approach belongs to the area of theme. In the following example: // John made me ANGRY //, which is declarative, unmarked in focus and unmarked in theme, actor = subject = given = theme.

Among a few American linguists who are concerned with FSP, Chafe approaches linguistic problems from the psychological aspect of language. He proposes an interdisciplinary area labeled 'psychosemantics'. Following Halliday, Chafe adopts the linguistic distinction between given and new information. Given information is that which the speaker assumes to be already present in the addressee's consciousness at the time of an utterance. In his recent mimeographed paper, he discusses the 'packaging' phenomena relevant to the status of noun as in the following: (1) the

noun may be either *given* or *new*; (2) it may be a *focus of contrast*; (3) it may be *definite* or *indefinite*; (4) it may be the *subject* of its sentence; (5) it may be the *topic* of its sentence; and (6) it may represent the individual whose *point of view* the speaker is taking or with whom the speaker empathizes.

For the description of the English and Japanese examples, in addition to the above basic concepts, some of which are more or less established in linguistics, the following are also particularly important and useful in the theory of FSP: interrelationships of FSP and phonological features of the sentence; Halliday's information focus, information unit and marked theme; Susumu Kuno's elaborated distinction of functions of Japanese particles *wa* and *ga*; presupposition; etc.

The analysis of a Japanese text in terms of theme-rheme structure, in comparison with its English translation, shows differences of structure between English and Japanese texts. As already indicated by several linguists, pronominalization in Japanese is very incomplete compared with that in English or other European languages which is, so to speak, perfect. The frequency in so-called 'fragmentary sentences' in spoken Japanese is much greater than in spoken English. They can be explained as sentences composed of rhemes only, as shown in the following diagram.

theme	rheme
(Boku wa)	Tsukareta
(I am)	tired

theme	rheme
(Anata wa)	Yotte ikimasuka
(You are)	Going to drop in there?